

かわさき生ごみリサイクル交流会だより

NO.14

2026年3月

発行：かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会

第14回かわさき生ごみリサイクル交流会

「生ごみは資源！」～農・花・人をつなぐコミュニティへ～

2026年2月21日、10の市民団体等で構成する実行委員会と環境局の主催により、第14回かわさき生ごみリサイクル交流会をてくのかわさきで開催しました。参加者は60名。第1部鴨志田純氏の講演では、生ごみ堆肥化や地域資源循環の仕組みづくりの取り組みを、第2部では、花壇に生ごみ堆肥の活用を昨年から挑戦している下小田中6丁目町会「結の花」の発表と、業務スーパーの生ごみを回収し堆肥を作り野菜栽培をしている「はぐるま農園」の取り組みの発表でした。“生ごみは資源”という基本的なことを考える有意義な交流会となりました。

第1部 講演 コンポストと地域循環とまちづくり～生ごみリサイクルでSDGs～

講師 鴨志田 純氏（鴨志田農園園主/コンポストアドバイザー）

【鴨志田農園とは】

2014年に家業を継ぎ、三鷹市で2800㎡の農園で野菜を作っています。農家の平均的な売り上げの2.5倍あるがそれが可能なのは、レタスなど畑の表面にある野菜を収穫した後は土の下にある里芋畑になり次の野菜を植えるまでの時間軸が短いことです。生ごみ堆肥や6種類くらいの堆肥を作りブレンドし使い分けています。いずれの堆肥を施した後もすぐに植え付けできるような堆肥に仕上がっています。生ごみを堆肥化したいというよりは生ごみを堆肥化することでいかに地域とつながり、社会課題を同時に解決していくかということを中心として行っています。同じような仲間を増やすため野菜栽培基礎講座（コンポスト学校）を開催し80名の修了生が全国各地にいます。

・知人を訪ねたネパールでの経験 こうした考えはネパールでの経験がきっかけです。カトマンズから車で2.5時間行った集積所のごみの臭いとメタンガスの発生を見て何かお手伝いできればと思い、帰国後、堆肥の勉強をし、再渡航。ネパールの国家プロジェクトとして生ごみ堆肥化が開始されました。現在は現地法人の取り組みにより、生ごみは豚の飼料となり、人間は豚肉を食べ、豚のふんが堆肥化されています。

・堆肥の材料には地域20km圏の未利用資源を活用しています。それは以下のようなものです。

C(炭素)資材：おが屑、バーク、竹チップ、剪定屑

N(窒素)資材：米糠、畜ふん、生ごみ、珈琲粕



鴨志田純氏 プロフィール

鴨志田農園6代目。コンポストアドバイザー。国内外で生ごみ堆肥や地域資源循環の仕組みづくり等を実践中。元数学教員。防災士。農学修士（専門は堆肥化に伴う温室効果ガス）

B(微生物)資材：落ち葉（土着の微生物）

M(ミネラル)資材：壁土、かやぶき、山土、かき殻

【取り組みの概要】

・鴨志田農園では、地域住民と年間契約を結ぶ野菜の定期便に、家庭用コンポストの利用を組み合わせた「サーキュラーエコノミー CSA(Community Supported Agriculture)」を展開しています。コンポスト容器は会員がDIYで作ります。会員は60名です。床材（基材）として落ち葉、もみ殻、米ぬか、壁土を2～3週間予備発酵させたものを入れ、各家庭に設置します。生ごみを投入し減量・減容させ、コンポストがいっぱいになったら農園で回収します。農園で高温発酵・熟成させ、年間約11,000リットルの生ごみ堆肥を作成します。その堆肥で野菜を栽培し、再び食卓へ届ける「食卓と畑を循環でつなぐ」仕組みを地域内で実現しています。

・この取り組みの優れた点は、生ごみ削減にとどまらず、環境・食育・防災をつなげた多面的な価値の創出にあります。緊急時にはコンポストがトイレ代わりとなり、さらに、皮やヘタまで使う「残渣ゼロレンピ」の発信や農園イベント・収穫体験・出張授業などを通じて家庭での食品ロス削減と資源循環の意識づけも促進しています。

・不耕起栽培もしています。耕起しないでライムギの



種を秋にまき5月に踏み倒し、種苗を植える栽培方法を試しました。2年目、耕起栽培より植える株数を少なくすると、ミニトマトの収量も味も耕起区と変わらず良かったのです。不耕起区の赤シソがこぼれ種から発芽し苗を育て植え付ける手間が省けました。

(写真は不耕起栽培区)

・目標は「ごみを捨てずに土に還す」ライフスタイルを地域に根付かせること。その達成に向けて重視しているのは、「環境から入らず、食から入る」こと。おいしい野菜を入口に、楽しく参加できるデザインを工夫することで、持続可能な取り組みとして支持を得ています。今後は地域や世代を超えてこの仕組みを広げていくことを目指しています。

[地域の資源を活用し魅力を発信している事例]

☆黒川温泉一帯地域プロジェクト(熊本県):美しい景観。落ち葉、旅館の調理残渣などで堆肥を作り、ハウス栽培のトマトを温泉湯上りのトマトジュースとして製品化。おいしいところから入っていく。(農林水産省・消費者庁・環境省主催「サステナアワード2020」にて「環境省環境経済課長賞」受賞)

☆重要文化財 立花邸御花(福岡県柳川市):消耗品に対しては文化庁の許可申請がいらないので畳をばらし、畳堆肥でい草を栽培し畳を作る。オーナー制で畳主を募り文化財に愛着を持ってもらう。

☆甲府まちなかエリアプラットフォーム:商店街の食品残渣→生ごみ堆肥化→農産物→飲食店へ循環。

☆土を育み、川を守る 郡上の資源循環教育(岐阜県郡上市):家庭・介護施設の生ごみ、落ち葉、建設残土で完熟堆肥づくりを通じ資源循環。

☆立命館大学の生協食堂の廃棄食材を学内コンポスト



で完熟堆肥化→きぬがさ農園で野菜栽培→生協食堂へ循環。

☆京都音楽博覧会を起点に発信する、資源が“くるりプロジェクト”:2万人フェスティバルでの食品残渣を公園内で堆肥化し公園で使う。

☆より豊かで持続可能な霧島を〜きりしまコンポストプロジェクト:鹿児島県の保育園児が生ごみを堆肥化し菜園に利用。日当山無垢(ひなたやまむく)食堂の生ごみは堆肥化され農家に循環。

[今後したいこと] 公共コンポストを所属流域で実装した場合の環境負荷低減効果に関する解明。今後も緩やかに活動を進めていけたらと思っています。

(まとめ 岩橋由紀子)

参考資料:「やさしい畑 2025年10月秋号」家の光協会

P.98~103 鴨志田純

報告 川崎市の生ごみ減量化・リサイクル推進事業の取組

(1) 生ごみリサイクルリーダー制度 生ごみリサイクル講習会の講師や、市内小学校での生ごみリサイクルに関する環境学習などで、現在16名の方が活躍しています。

(2) 家庭用生ごみ処理機の購入費助成制度

電動生ごみ処理機や生ごみコンポスト化容器、密閉容器などの購入費を一部助成しています。

(3) 生ごみリサイクル活動助成制度

家庭の生ごみを堆肥化し、地域の農地や公共の花壇で活用する市民団体の活動立ち上げ支援のため、活動経費の一部を助成しています。

(4) 生ごみ堆肥の受け入れ

各家庭で使いきれない生ごみ堆肥について、市内9か所で受け入れを行っています。

(環境局減量推進課 石井萌)

第2部 生ごみリサイクルを実践している事例発表

① 下小田中6丁目町会結の花 村越俊之さん

～江川せせらぎ遊歩道での私たちの活動～

結の花は、川崎市から「公園緑地での草花の育成活動」の許可を受け、協定を結んでいます。花壇のデザイン、花植えや手入れ、遊歩道の清掃から季節のイベントまで活動は多岐にわたります。色々な分野を得意とされる方たちがメンバーとして集まり協力して活動をされています。近隣の小学校の園芸委員会と花植え会と一緒にされており、抜いた根っこや土を再生できないか、との話をきっかけに生ごみリサイクルリーダーとながりを持ち、生ごみリサイクル活動の取り組みを始めました。



町内会の減量指導員連絡会で、助成金活用の生ごみリサイクルを提案。ダンボールコンポストの入門講座、フォローアップ講座をつぎつぎと開催。地域住民へ働きかけ、生ごみリサイクルを実践する仲間をどんどん増やしていきました。

結の花の活動年数は浅いですが、そのパワーはどのグループにも負けないのを感じました。花壇のデザインも工夫され、そこに竹炭を敷くなど素材も工夫して作成されています。生ごみリサイクル交流会実行委員有志で事前に見学にいきましたが、小学校の園芸委員と先生が花植え会をされていて、結の花のメンバーがグループに分かれ、小学生に植え方を教えながら楽しく活動をされていました。

遊歩道には、車いすで立ち寄り花を眺める人、結の花のメンバーと言葉を交わす人など人通りも多く地域の方々とコミュニケーションが生まれ、せせらぎにはカモがゆったりと泳いで、心落ち着くスペースになっていました。地域のメンバーのチームワークで、ますます地域のなくてはならない場所に育てていってほしいです。(まとめ 門平きょう子)



② はぐるま農園 石澤幸樹さん

～福祉施設からはじまる生ごみ資源循環の取り組み～

はぐるま農園は社会福祉法人はぐるまの会が運営する農園で、知的障害のある仲間たちが力いっぱい働くための作業所です。はぐるまの会がこの交流会で発表するのは今回で4回目です。第1回目の2014年は「あさお生きごみ隊」の生ごみ堆肥作りを手伝ったことをきっかけに、生ごみ堆肥を野菜作りに使い始めたこと、その後、無農薬・生ごみ堆肥などの有機肥料で野菜を作り、野菜販売にもトライして、地域の人との交流が増えるなど、毎回の発表ごとに進化された様子がうかがわれました。



今回は、これまでの活動を基にして、会にある2つの施設、多摩区菅馬場の「はぐるま共同作業所(名称みらぼ)」と宮前区水沢の「はぐるま稗原農園」が紹介されました。「みらぼ」から毎日出る生ごみを施設入口にある電動処理機で一次処理したものを稗原農園の堆肥場に運び、ヤシ殻、くん炭、米ぬかなどと共に投入、切返しして堆肥化します。堆肥は農園の野菜作りに使い、

近所で野菜販売もしています。6年前からは稗原農園に近い榊良知経営の業務スーパー宮前店と荏田(えだ)西店から出る野菜くずを毎週1回収(写真右)。宮前店には稗原農園でできた野菜を店の一角で販売しています。回収した野菜くず(毎週20～40kg)は生田緑地に隣接する広大な松本傳佐衛門農園に運ぶと松本農園が切返しなど管理を協力してくれています。できた堆肥はそこに借りた畑で野菜作りに使います。まだすべての野菜には生ごみ堆肥を使えていませんが、循環が少しずつ形になってきています。(まとめ 奥山玲子)



鴨志田氏からのひとこと

結の花とはぐるま農園の貴重な循環のお話聞かせていただいております。川崎市はコンポストでグループを作ると助成金が出るのは新鮮だなと思いました。三鷹市は生ごみ処理機購入助成金が毎年余っていてもつたないなと思っていて川崎市のように使いきれるといいなと思います。三鷹市も頑張ります。

アンケートから

一般参加者 45 人中、43 人と多数の方から回答いただきました。参加者は 50 歳代から 70 歳代までが多かったのですが、10 歳代、30 歳代など若い方の参加もありました。「とても興味深く、学びや驚きがたくさんあり感動した」鴨志田さんの話から「最新の情報サーキュラーエコノミーが聞けてとても良かった」「取り組みを聞いて身近な人を巻き込んでできないかと勇気がわいた」「コンポストが非常時にトイレの代替品になるとは意外。コンポストすごい!」「高齢者福祉の場で働いている。大きな庭があり、花を植えているのを見て興味をもった、今後活かしたい」など多くの方から感想をいただきました。(門平きょう子)

開催にあたり 環境局減量推進課長 山田俊彦

川崎市は市民・事業者・行政で協働してごみの減量に取り組んできた結果、令和 5 年度の「1 人 1 日当たりのごみ排出量」が政令市で最小となりました。

ごみを燃やすことで温室効果ガスが出ます。特にプラスチックを燃やすことで多く発生するため、これまで燃やしていたプラスチック製品をプラスチック資源として収集しリサイクルする取組を令和 8 年 4 月から全市実施します。また、家庭ごみの 4 分の 1 を占める生ごみの削減も重要です。生ごみを出さない、出た生ごみはリサイクルすることで脱炭素社会の実現に繋がります。

本交流会は生ごみ減量に向けた協働の取組を充実させる上で大変有意義であり、今後の活動に繋がる交流の場となれば幸いです。

交流会を終えて 実行委員長 岩橋由紀子

今年も川崎市環境局と協働で開催できたこと、多くの方のお世話になりました。この日を迎えられることをうれしく思っています。講演・発表に対して、「野菜栽培などどこで学べばよいか、緊急時にコンポストがトイレになることの驚き、学校での置き場所のこと、コンポストの助成金が早くなくなること、迷惑のかからない竹炭の作り方、リサイクルに関心を持たない人への伝え方、世界のどのエリアくらいまでリサイクルが可能か、例えば高度や緯度の違い」など質問や感想がたくさん出ました。閉会后、講演、発表なさった方どうし、参加した人たちで情報交換し、堆肥相談会、ハーブティーコーナーにもぎわいました。交流会がお役に立ったなら幸いです。



●生ごみリサイクルの相談コーナーを設置

川崎市生ごみリサイクルリーダーがダンボールコンポストと密閉容器による方法の紹介をしました。多くの方が訪れ人気でした。

●展示コーナーを設け、活動の様子をパネルなどで説明

●休憩時間にはぐるまの会の協力でハーブティとクッキーを用意
美味しいティーツーとクッキーのコーナーに沢山の人が立ち寄りました。



かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会 2025

委員長 岩橋由紀子 (あさお生きごみ隊)
副委員長 奥山玲子 (吹込花壇の会)
門平きょう子 (川崎市生ごみリサイクルリーダー)
竹内ふみ子 (エコグリーンクラブ)
戸高仁子 (久地フレッシュグリーン倶楽部)
福田 真 (社会福祉法人はぐるまの会)
松島洋 (川崎市生ごみリサイクルリーダー)
村山美香子 (エコガーデンはるひ野)
柳下博子 (幸・循環型社会を考える会)
吉田賢治 (EM 普及活動研究会)

発行日 : 2026 年 3 月 25 日
事務局 (川崎市環境局生活環境部減量推進課)
山田俊彦課長、小宮智之係長、石井萌
連絡先 : 川崎市環境局減量推進課
電話 044-200-2579
〒210-8577 川崎市川崎区宮本町 1

かわさき生ごみリサイクル交流会だより第 14 号編集
門平きょう子、岩橋由紀子、奥山玲子、(協力)飯田和子